

大学教員が語る大学入学最低学力

—「学力担保のためのテスト」の可能性とその意味—

濱中淳子，山村滋，鈴木規夫（大学入試センター）

学力試験を課さないAO入試や推薦入試が増えているなか，大学入学者の学力を担保するためのテストへの関心が高まっている。しかし，入学要件となる学力が明示されていないこともあり，そのテストの具体的な姿はいまだみえていない。本稿は，各大学の入試責任者から収集した「大学入学最低学力の定義」への意見を取り上げ，その特質を整理することによって，新しいテストの実現性と意味を考えるものである。

1 問題の所在：定まらない入学要件

大学入学者の学力を担保するためのテストへの関心が高まっている。2008年12月には，中央教育審議会が答申「学士課程教育の構築に向けて」のなかで，「高大接続テスト(仮称)」の可能性について言及した。「高等学校の学力を客観的に把握・活用するための新たな仕組み」として必要なものだという。

以上の動きの背景には，高校教育の多様化，さらには「全入時代」が到来するなかで，大学進学に必要な学力を身に付けていない学生が増加したという関係者の判断がある。とくに学力試験を課さないAO入試や推薦入試で入学する学生が，大幅に増えたことへの懸念は大きい。彼／彼女らにも学力テストを課すべきではないか。なんらかの入学要件を設ける必要があるのではないか。こうしたなか，新しいテストのあり方の模索は既に始まっている（『日本経済新聞』2009.4.20朝刊）。

けれども他方で，新しいテストをめぐる議論にいまひとつ現実味が感じられないのも確かだろう。学生の学力問題が重要だとしても，具体的にどのような学力を入学要件とするのか。この点が明示されていないからである。

入学要件となる学力を定める——いうまでもなく，これはきわめて困難な課題である。理念がからむ問題でもあり，意見は多様というのが実状であろう。けれども，いったん，

定義についてなんらかの解をあてはめなければ，テスト具体化への一步を踏み出せないだけでなく，テスト導入の意味を十分に検討することができなくなる。この検討結果次第では，テスト導入自体を見合わせたほうが良いという結論に達することがあるかもしれない。

こうした観点から，本稿では，大学入学要件の定義を探ることによって，いまだ具体的な姿がみえてこない新しいテストについて，それを議論するための「叩き台」を提示することを試みたいと思う。叩き台があってはじめてみえるテスト化の意味もあるだろうし，見落としていた問題点に気づくこともあろう。

そのために用いるのは，全国各大学の入試責任者から収集した「(入学者に求める)最低学力の定義」への意見である。必ずしも，「入学要件=最低学力」となるわけではないが，既に学生の学力低下，多様化が憂慮されている昨今である。大学側が考える最低限の学力は，現実的な入学要件，ひいては新しいテストの輪郭を描く際の重要な情報になると判断した。なお，これら意見は，大学入試センター研究開発部試験基盤設計部門が各大学入試責任者を対象に実施した質問紙調査『大学入試センター試験・大学入試の考え方等に関する調査』（実施時期：2008年夏）のなかで収集したものである。自由記述形式としたが，配布数723，回収数609（回収率84.2%）の

うち、この部分の回答が確認されたのは 495 (配布数の 68.5%, 回収数の 81.3%) だった。以下、得られた回答記述から、大学入学要件を考えるための情報を整理し、考察を加えることにしたい。

2 分析の視点と方法

2.1 3つの視点

本稿では、分析にあたって、3つの視点を設定した。

第1は、レベルである。 現行のセンター試験を引き合いに出せば、高等学校の学習指導要領に準じて作成されており、平均が6割になるレベルで作成されている。そしてこのレベルについては、「最低学力をみるものとしては高すぎる」という声も聞く。では、大学教員は「最低学力」をどのレベルだと言及しているのか。これが最初の視点である。

第2は、領域である。 センター試験はアラカルト方式をとっているが、教科別受験者数にはかなりの偏りがある。受験者が集中しているのは英語と国語の2教科であり、平成20年度受験者数は順に50万人と48万人。次に受験者数が多い数学(30万人強)との間にはかなりの差が開いている。多くの大学がこれら2教科を中心とした教科構成での受験を課している結果だと考えられるが、では、最低学力に関しても英語・国語の2教科が大事だとみられているのだろうか。違うとすれば、そのニーズはどこに集中しているのか。この点について探っていくことにしたい。

さて、以上2つが、最低学力の特質を大きく捉えようとするものであったとすれば、第3の視点は、数理能力という1つの能力をり上げ、より具体的な検討を加えるものである。 議論を先取りすれば、第2の領域部分では、いわゆる数理能力に関する記述も多く確認される。そして、この能力は積み上げ型の典型でもあり、レベルのイメージがつかみやすい。そこで、最低学力への理解を深めるた

めにも、この能力を取り上げることにしよう。大学教員は、最低限の数理能力について、どのような表現を用いて回答しているのか。その具体的な回答事例をみてみたいと思う。

2.2 分析の方法

まず、自由記述を俯瞰的にみれば、全体の約2割に次のような記述が確認されることに気づく。

- 大学入学後、授業を受講するにあたって事前に必要な学力水準
- 大学教育にスムーズに入ることができる基本的学力
- 大学入学後、補習が不要な学力

なるほど、まさにこれこそが最低学力なのであろうし、なかには切実な訴えとして書かれたものもあるだろう。しかしながら、本稿の視点に照らし合わせれば、こうした回答からレベルや領域についての情報を収集することはできない。大学教育の内容がどのようなものなのかによって、これら回答が示す内容は異なってくるからだ。

そこで本稿では、以上のような回答を除く378の回答を、直接の分析対象とすることにした。そのうえで、「レベル」と「領域」について回答内容をコード化し、さらにその作業を何度か繰り返すことによって妥当性を検証した。以下では、このようにして割り当てたコードを用いて、分析を進めることにしたい。

自由回答方式では回答者が書き損じた意見もあるだろうし、なかには漠然とした記述もある。したがって、その内容分析に曖昧さが伴うのは避けられない。むしろ調査者の側からレベルや領域などをめぐる選択肢を提示し、意見を尋ねるという方法でアプローチしたほうがいいのではないかという批判も出てこよう。しかし、何も条件を与えないなかで書いてもらった言葉のほうが日常から感じている考えが表れるともいえるし、なによりも自由

記述回答分析は、議論が十分に蓄積されていない問題に迫る際の有益な方法である。決して無効なデータではなく、本稿ではこの方法で情報を引き出すことに注力したいと思う。

3 レベルをめぐる語りの分析

3.1 3+2のレベル区分

レベル問題からみてみよう。分析の結果、回答からは、まず、次の3つのレベル区分が抽出された²⁾。

1. 高校教育全般の学習を前提に、ある程度の理解を求めているもの
2. 高校前半時代における学習内容の理解を求めているもの
3. 中学校卒業程度の学習内容の理解を求めているもの

これらは具体的な学校教育段階の表現を用いているもので、想定されているレベルもわかりやすい。ただ他方で、レベルが推測し得る次のような回答も少なからず見出された。

- A. 読み・書き・そろばん（計算）の能力獲得を求めているもの
- B. 文章力・表現力・思考力の獲得を求めているもの

前者の「読み・書き・そろばん」がどのレベルのことを指しているかは一概には言えないが、義務教育+α程度の能力だと判断していいだろう。少なくとも、高卒程度の能力を意味する言葉ではない。そして後者の「文章

力・表現力・思考力」は、「読み・書き・そろばん」に重なるところがありつつも、それより高度な能力を想定した回答になっているとみていいように思う。

このように、学校教育段階の言葉を用いた3つの区分。さらに能力表現から推測される2つの区分。多くの回答が、これら3+2=5区分のいずれかに分けることができた(図1)。では、大学教員のどの程度が、どのタイプのレベルを最低学力だとしていたのか。次いで、この点について説明する。

3.2 レベルの回答分布

理屈でいえば、「高校教育全体を前提にしたある程度の理解」が最低学力ということになるかと思う。しかし、そのように回答した者は既に多くない。レベルに関する記述が確認された回答は、全体で303。うち、最低学力を「高校全体を前提にしたある程度の理解」という文脈で記述したものは149。全体の49.2%と、全体の半数に過ぎなかった。

では、残り半分はどう分布していたのか。それぞれの回答数と比率は次のとおりである。

- 高校前半時代の理解：36 (11.9%)
- 中卒程度の理解：48 (15.8%)
- 読み・書き・そろばん：43 (14.2%)
- 文章力・表現力・思考力：27 (8.9%)

「中学校卒業程度」と「読み・書き・そろばん」は合わせて30.0%、3人に1人という割合でこのレベルの回答を返してきているこ

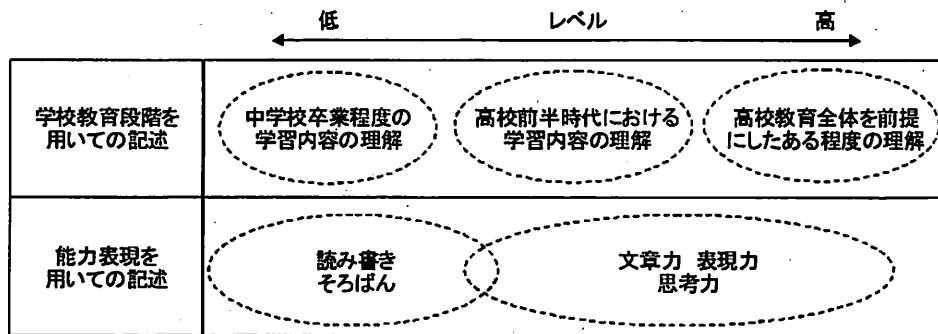


図1 3+2のレベル区分

		← レベル →		
		低	高	高
学校教育段階を用いての記述	【中卒レベルの理解】	国立： 2.6% 公立： 18.5% 私立： 17.6%	【高校前半の理解】	【高校全体ある程度の理解】
		国立： 0.0% 公立： 3.7% 私立： 14.7%	国立： 92.1% 公立： 55.6% 私立： 41.6%	
能力表現を用いての記述	【読み・書き・そろばん】	国立： 2.6% 公立： 11.1% 私立： 16.4%	【文章力・表現力・思考力】	
		国立： 2.6% 公立： 11.1% 私立： 8.9%		

図 2 設置者別にみた回答分布

とは注目される。高校前半時代の理解を求める層（11.9%）より、その比率は大きい。

そして、このような低いレベルを要件とする回答の多くは、私立大学教員から寄せられていた。図 2 は、設置者別に回答状況を示したものである。これをみると、国立大学の教員は 9 割が、高校全体を前提にしたある程度の理解を求めている。ところが、私立大学のその部分の比率は 5 割をきっている。そして、高校前半の理解が 14.7%、文章力・表現力・思考力を求めるものが 8.9%であり、さらに中卒レベルの理解 17.6%、読み・書き・そろばん 16.4%。私立大学教員が求める最低学力のレベルは、かなり低いものになっている。

4 どの領域が重視されているのか

次に、最低学力として求められている領域についてみてみよう。自由回答には、教科名や具体的な能力を挙げるものが少なからず含まれていた。「読み」、「書き」、「文章力」、「表現力」、そして「日本語」を国語として捉え、「そろばん」と「計算」というワードは数学だと見做せば、全回答のうち、領域についてなんらかの言及があったのは 163、全体の 3 割強であった。ここでは、この 163 の回答を用いて、最低学力としてイメージされる領域について分析してみたいと思う。

図 3 は、領域の別に、得られた回答の合計数を示したものである³⁾。ここからは、もっとも重視されている領域は国語であり、数学、

英語、理科、社会と続いていることがわかる。英語に対するニーズが大きく後退するなど、先に述べたセンター試験へのニーズとは異なる様相をみせている。

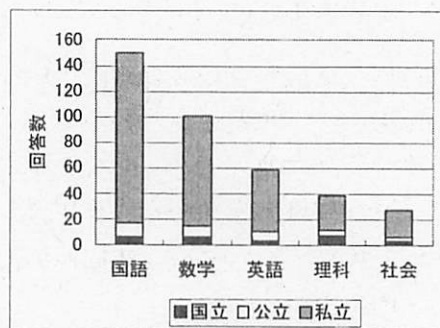


図 3 領域別回答数

当然ながら、国語がトップになったことには、「読み」、「書き」、そして「文章力」、「表現力」といった回答まで国語としてカウントしたことがおおいに関係している。最低学力として重視する領域を提示し、選択させるという調査方法をとれば、また異なる分布が得られるかもしれない。

しかし、だからといって、この分布に意味がないということにはならないはずだ。文献を読む。レポートを書く。ゼミで意見を述べる。大学での学習では、こうした作業が重要になってくる。大学教育の土台になっているといってもいい。そうしたなか、最低限の条件として、国語の学力が重視されるのは十分にあり得ることであろう。学習の多くは日本

語で行われる。まず、日常の学習をきちんと成立させたい。以上の結果は、こうした教員たちの考えの表れだと解釈することができる。

5 求められる数理能力

英語よりも数学のほうに回答が集中していた点も興味深い。センター試験レベルの試験については、英語と国語が大事。しかし、最低学力という次元では、国語と数学のほうが大それたということである。

ただ、その「大事」だということも、かなり低いレベルでの要求になっているようだ。というのは、回答の内容からは、「これぐらいの数理能力は身につけてきてほしい」という大学教員の切実な願いが強く感じられるからである。「そろばん」、「計算」といった回答もそうだが、他にも次のような表現で数学の能力を求める回答が見受けられた。

- パーセントを知っている (国立)
- 分数の足し算ができる (公立)
- 数字アレルギーがない (私立)
- 四則計算、割合・率の概念、図形の基礎、文字式をある程度理解し使うことができる (私立)
- 九九ができる (私立)
- 小学生レベルの小数、分数の計算 (私立)

1990年代の終わりから2000年代初めにかけて、分数や小数ができない大学生の問題を提起する書籍が相次いで出版されたことは記憶に新しい(岡部・戸瀬・西村編 1999, 岡部・戸瀬・西村編 2000)。今回の自由記述も、これら提起に通じるところが多分にある。簡単な計算もできない大学生。せめてそれぐらいのことはできてくれないと、教育が成り立たないと考えている大学教員。こうした図式は、もはや珍しいものではなくなっているようだ。

6 まとめと考察

大学教員は、何を「最低学力」としている

のか。まず、この特質について、以上でみてきたことの要点をまとめておこう。

1. 理屈で考えると、「高校教育全体を前提にしたある程度の理解」というのが最低学力ということになるだろうが、既にそのような意見は多くない。とくに私立の教員でそのような回答を記述してきた者は半数を切っており、「中卒レベルの理解」あるいは「読み・書き・そろばん」だとする意見も確認される。
2. 最低学力として触れられることがもっとも多かったのは国語であり、以下、数学、英語、理科、社会と続く。英語よりも国語と数学の学力が求められていることは、センター試験へのニーズとの比較からも、注目される。
3. 数学(数理能力)に焦点をあて、具体的な回答内容をみると、「分数」、「率」、「割合」、「四則演算」、「九九」といった記述が確認される。数学というより、むしろ算数に近い内容を求める要望が、あらわれ始めている。

さて、ここで本稿のねらいに戻ることしよう。本稿の目的は、学力を担保するための新しいテストについて考えるための「叩き台」を示すことにある。その目的に即し、最後に、以上の結果を踏まえた3つの問いを提示しておきたいと思う。

第1は、新しいテストを作成するにあたって、大学教員が指摘する最低学力をどの程度、そしてどのように考慮するか、ということである。冒頭でも述べたとおり、必ずしも「入学要件学力=最低学力」とする必要はない。学力の引き上げ効果をねらうのであれば、最低学力よりもやや高めに要件を設定するというのも1つの選択肢である。けれども、そのギャップが大きければ大きいほど、実態として機能しない要件になってしまうのは目に見えている。だとすれば、やはり「中卒程度」

や「読み・書き・そろばん」が入学要件となるのか。その場合、とくに、「高校教育全体を前提にしたある程度理解」を要件として挙げたような大学から反論が出てくるのではないか。その部分の調整をどうするのか。これが、最初の疑問である。

第2は、国語の力を計測するテストの可能性についてである。大学に入学するのであれば、最低限、読む力と書く力をつけてほしい。これが多くの、とりわけ私立大学の教員たちの考えだった。しかし、これら能力を大規模な統一テストでみるのは、かなり難しいことであるように思える。また、コストもおおいかかるはずだ。現実の問題として、可能なことなのか。技術面や予算面からの検討を要する問題である。

そして第3は、テストの社会的影響である。第1の点とも関連するが、仮に「最低学力」を踏まえたテストを作成することになったとしよう。そのテストは、たしかに最低学力すら獲得できていない進路希望者には、学習への良いインセンティブになるかもしれない。しかし他方で、それ以上の学力を既に獲得している層にとってはどうか。「この程度の学力でいいのか」という判断、ひいては学習意欲の減退という効果をもたらしてしまうという可能性も考えられるのではないか。また、いったんテストを作成してしまえば、その情報は国外にも伝わることになる。日本の大学のレベルが分かりやすいかたちで、広まることになる。このことが何を意味するのか。吟味する必要があるように思われる。

以上が、本稿が提示できる論点であるが、根拠としたデータの量や質からみても再検討が必要なものであることはいうまでもない。改めて精度の高い調査を実施することが求められるし、議論の切り口もまだ多様に設定されよう。ただそれでも1つ指摘しておきたいのは、入学要件問題には、レベルや領域を具体的に想定して、はじめて見えてくるものが

多いということである。「学生の学力が問題だ」、「何か手立てを打たなければならない」では、見えてこないことがあまりに多い。学生の学力担保をどうするのか。具体的な、そして多面的な議論の蓄積が望まれる。

注

- 1) 具体的には、次のような文言で回答を求めている——「『最低学力』という言葉で、先生が連想されるのはどのような定義になりますか。どのような表現でもかまいませんので、ご自由にご記入ください。」
- 2) それぞれ、具体的な表現の事例を示せば、次のようなものである。
 - 高校教育全般の学習を前提に、ある程度理解を求めているもの…「高等学校卒業と認められる能力」、「高校生が身につけるべき基礎学力」
 - 高校前半に特化したもの…「高校2年までの教科書の例題程度」、「高校1年生段階の履習内容」
 - 中学校卒業程度の理解を求めているもの…「中学卒業程度」、「小・中学校程度の知識」
- 3) たとえば、A大学の教員が「読み書きできる」、B大学の教員が「国・数・英」、C大学の教員が「生物」という回答を寄せていたとすれば、これら3大学で、国語2、数学1、英語1、理科1、社会0というカウントとなる。こうした作業を163大学分、行った結果が図3になる。

参考文献

- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄(編)(1999)。
『分数ができない大学生——21世紀の日本が危ない』東洋経済新報社。
- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄(編)(2000)。
『小数ができない大学生——国公立大学も学力崩壊』東洋経済新報社。